

花哨戒日記

▼ 神無月 一日

本日より新たに冊子を下ろした。この日記もこれで二十八冊目となる。

楓に勧められるまま始めてみた日記……というよりは備忘録だが、数えてみれば随分と続いているものだ。文筆など白狼の自分には向いていないと決めつけていたが、何事も試してみなければ分からないという、当たり前のことを痛感させられた。楓が新聞大会出場に拘る理由も少しだけ分かった気がする。

秋の人事異動に伴う、新人の着任式典に出席。当小隊への配属は棗、杏、菜の三名。

着任式の最中に堂々と居眠りを始めるわ、自己紹介といいつつ三尺坊様に反抗するわ、挨拶そっちのけで喧嘩を始めるわと、まあ実に個性的だ。経歴に目を通して見たところ、担当教官の所見が欄をはみ出し別紙に溢れていた。鎬原の練兵校も更生の匙を投げたという筋金入りだそうだが、三尺坊様はうちを愚連隊にしたいとでもお考えなのか。

午後より入堂の説明と案内に時間を取り、夕刻より楓、椿らとともに歓迎会を開く。しばらくは新人一名、班員二名の三人一組体制で実地訓練を兼ねたローテーションを組むが、無事に済むとは思えなく、椿と共にしばし頭を抱えた。

せめて大事にならずに過ぎてくれればいいのだが。

▼ 神無月 二日

御山にて月一の定例会議。南西、向日葵畑の異常開花に関して報告。鞍馬様より数点、補足を頂く。地脈の変動に関して質疑が集中し、十五分ほど予定を遅延して散会。

別件で御山に居た楓と合流し、「緋扇」で昼食をとる。店内ではたて様と相席となり、直々に新人三名についてよろしくと頼まれた。聞けば彼女達、姫海棠の御領山である鎌ヶ原の氏族出身であるのだそうだ。

ご母堂からそれとなく配慮しておくようにと釘を刺されたとのことで、はたて様はだいぶお疲れのようであつた。九大天狗の御息女ともなれば気苦労は絶えぬのであろう。

詰め所に戻るとさっそく棗が問題を起こしていた。哨戒中に別任務に従事していた浅木小隊の班員と遭遇し、彼等の勤務態度を咎めたことが切っ掛けとなり乱闘騒ぎになったとのこと。本人は不正を糺したということでもむしろ誇らしげであり、褒めてもらいたそうに尻尾まで振って報告する有様。現場には杏も居合わせていたというので状況を訊ねるが、面倒そうなので関わりを避けたとのことであつた。勘弁してもらいたい。

両名を含む班員全員に反省文を命じる。正式な処分は浅木小隊からの抗議待ちだが、穏便に済むとは思ひ難く、頭痛が増した。

▼ 神無月 四日

連勤よりの夜勤明け。来月初旬の観兵式に向けての打ち合わせの最中、詰め所に素が飛び込んできた。憤慨した様子で語るのをなだめて聞いてみれば、鍛錬場で鴉天狗が横暴な振る舞いに至っているのだと言う。

嫌な予感を覚えつつ向かってみれば案の定、道場には文さんの姿。いつもの調子で隊員に絡んでおり、葉に至っては泣き出す寸前であった。怯える彼女の初々しい反応がお気に召したようで、嬉々としてシャッターを切っていた文さんを制止。多少の実力行使を交え、丁重にお引き取り頂く。

御山では観兵式に備えて連日、訓練と準備会議のはずだが、仮にも射命丸の三郎坊を襲名されているお方がこんな事をしている暇があるのだろうか。

少し意外だったのは、文さんを前に古参班員も委縮する中で、杏が泣きそうになった葉を庇っていたこと。相変わらず面倒そうな様子ではあったが、あれで案外仲間意識の強い娘なのかもしれない。

▼神無月 五日

紅葉の彩りが御山の中腹まで辿り着く。紅葉と落ち葉の管理のため、静葉様は毎日お忙しうだ。誰も目にしないような秘境の山麓まで出向いて、妥協せず秋を彩る地道な作業の繰り返し。毎年ながら頭の下がる思いである。

夜勤明けにふと蕎麦が食べたくなり、久々に打つことにした。仕事帰りに乾物屋に寄ってみたところ、珍しく鰹節に干し昆布などが並べてあり、驚く。ただでさえ海の遠い幻想郷、まして御山には滅多に入らない珍品だけに気になって店主に尋ねてみたところ、いずれも守矢神社経由の品であるという。彼女達がいまだ外の世界と繋がりを保っているのではないかというのは以前からの噂であるが、その信憑性が幾分増したように思われる。

疑念は湧いたが、いずれにせよ品物に罪はなく、これを見逃す手はない。価格も手頃とあって、やや多めに買い込んだ。奮発して鴨せいろとしたが、いざ食べようとしたところで文さんが来訪しひと悶着。普段は気にも留めないくせに、こういう時だけ鳥類代表の様な顔をして非難を向けてくるのはいかなものか。

▼ 神無月 六日

非番。好天であつたため午前より滞りがちだつた洗濯と掃除を済ませる。昼過ぎになつてにとりが来訪。昨日の蕎麦を振舞う。相変わらず美味しい美味しいと世辞を言つていた。

午後から休憩をはさみ、夕刻まで先月よりの対局の続きを進める。

途中、前回までと悪狼の駒の位置がずれていると言ひ合ひになり、弾幕で勝負を付けることになつた。結果は惜敗。こちらのスペルの手持ちがないのをいいことに3枚勝負を挑んでくるのは卑怯だと思ふ。

最終的に、にとりの言ひ分が通つた形となり、局面は四・六で私の不利となつて次回へ持ち越しである。封じ手を切つたにとりはまたこのようないやう証拠写真を取るなどと息巻いていたが、誓つて私は駒を動かした覚えはない。

自慢ではないが我が家に目ぼしい品などなく、お役目に関する資料などは全て詰め所に収めてある。大将棋の時以外に奥の部屋は使わないし、まさか不埒者が入り込むとも考えられない。盤面は半月前そのままに置いてあるはずだ。

以後、多過なし。夕飯は蕎麦の残りで一杯つけることとした。

▼ 神無月 七日

哨戒からの帰還途中、幽森を過ぎたあたりの沢で、雛様が川を流れされていくのを目撃する。彼女が流し雛であるというのは承知しているものの、無表情で流れに身を任せている様はいかにも不気味であった。

一応、なにかあったのか聞いてみたものの、雛様の返答は単にそういう気分であるからだとのこと。どうもいまいちこの人のことはよく分らない。

午後より御山中央での定期報告。鞍馬様のご配慮によって先日の乱闘騒ぎは訓告で済むことになった。浅木小隊の柊殿にもご迷惑をかけ通しで、申し訳ないばかりである。

その後直帰となり、董たちに誘われて目抜き通りの甘味処へ。ここの饅蜜は好物であるが、度々になるといささか飽きるのも確か。人里のほうには近頃洋風の甘味を扱う店が増えたと聞く。一度行ってみたいものだ。

夜半より雨。冷え込むため毛布を出す。

▼ 神無月 十日

昨日より昼夜連勤。亥の刻に退所し、引き継ぎの後に楓たちと合流、そのまま足を伸ばして黄昏森の夜雀庵へと向かう。それなりに遅い時刻と思われたが、月齢のせいもあってか店は賑わっていた。

女将によれば、最近は八つ目ではない鰻がやたらに豊漁であり、いまはそちらも出しているとのこと、それを注文。

確かに脂が乗っていて旨いことは旨いが、柔らかすぎるのと、風味に癖が足りず酒にはあまり合わないように思う。丼にでもして白飯に合わせてみたらどうかと提案したところ、女将がたいへん面白がっていた。次回までに新メニューができているかもしれない。

額に汗し働く女将の様子は既に立派な商人。人間を鳥目にする目的の一環で始めたはずの夜雀の鰻屋だが、もはや一端の飲み屋として充実しているようなので、これはこれで今の妖怪の在り方というべきなのだろうか。

▼神無月 十一日

守矢神社への定期巡回。報告のついでに先日の際節の件についてそれとなく確認をしてみたが、巫女によればあれらは里の信徒からの奉納品であるとの返答であった。

なんでも先頃、里の近郊の森に新しく廃屋が発見され、その蔵から多くの保存食が見つかったのだという。保存状態も極めて良好、量も豊富であったことから、発見者である里の金貸しの好意によって秋の収穫祭で多くが振る舞われ、それらが巡り巡って御山まで回って来たらしい。

これまでも廃屋が結界を越えて出現することはまま確認されているが、今回は思わぬ棚ぼたであったということだろうか。

夕刻より鞍馬様主催の懇親会に出席。観兵式に向けての結束を高め士気を養うとの名目であるが、正直、鴉天狗や鼻高天狗のお歴々に囲まれて寛げるはずもなく、ただただ苦痛の時間であった。三刻ほど過ぎて音を上げた素らをはたて様に任せ、以後は一人で吞む。このような時一番鬱陶しい文さんが不在であったのが幸いであった。

▼ 神無月 十二日

昨夜の宴会があとを引き、いまいち寝付けぬままに夜が過ぎた。酔いも醒め、眠れそうにないたため身体を動かそうと鍛錬場に向かってみれば、まだ暗い道場に先客の気配。一体誰かと思えば文さんであった。

夜も明けぬうちから一体どういう風の吹きまわしか、文さんは随分と熱心に木剣を振っていた。私が近付くのにちも気づかなかったところを見ると相当集中していたらしい。

こんな時間から何事かと問うてみるも、文さんの返答は曖昧で要領を得ず、ますます疑念が深まる。改めて様子を見れば、あちこちに怪我もしている様子。一応は先輩であるので案じてみたものの、文さんは仏頂面になる一方で、しまいには怒り出す始末。

そのままなし崩しに朝まで稽古に付き合わされた。

理不尽な扱いの腹癒せに、大人げなく本気になって相手をしたが、終盤涙目になっても音を上げなかったのは流石の鴉天狗の矜持であろう。

遅い朝食の後、仮眠。午後より哨戒任務にて詰め所へ。後、多過なし。

▼ 神無月 十三日

非番。市での買い出しが思いのほか早く済んだため、午後より自主鍛錬に入る。

先日のにとりとの弾幕勝負の結果が不本意であったため、新スペルの開発に注力した。

戦績を振り返るに、彼女との対戦では中々遠距離での弾幕で力負けすることがまま見られる。

この不利が後を引いて被弾する展開が多く見られたことから、射程に優れた河童の道具に対抗する弾幕が必要不可欠との結論に至る。

以前に試作した遠距離砲撃用のスペルを複数試すが、デッキコスト内に収めるといずれも火力不足と感じられた。弾幕の密度、発射間隔など試行錯誤してみたものの、小手先の工夫では捗々しい結果は得られず。

自分が千里眼という生来の能力を生かし切れていないとの指摘は以前より受けていたが、改めて、自分が遠距離での弾幕戦を不得手としていたことを思い知らされた。

自身の役割を鑑みるに欠点の克服は急務であるが、即座に対応が可能とは思えず、むしろ遠距離戦の不利は割り切って至近用のスペルに特化すべきかもしれない。

夕食は釜飯とした。茸の美味しい季節になってありがたい。

留守かな？

出直すのも面倒だから
例のゴーグル置いていくよ。
調整はそっちでお願い。

もうすぐ十五夜だし

来週あたりに一杯やろう。

にほんブログ村

▼ 神無月 十四日

人の日記を連絡帳代わりに使わないでもらいたい。出しゃばなしにしておいた私にも落ち度
はあったと思うが、メモくらい他の方法で残せばいいだろうに。

……見られて困るような事は一応、書いていないつもりだけれど。

ゴーグルの動作は極めて良好。調整もすぐに済み、光量のない夜の森でも十分な視界が確保
できた。長時間稼働に対して動力の確保が厄介だが、当面はにとりに借りた胡瓜式蓄電池で賄
うこととする。

▼ 神無月 十五日

先日の鍛錬所での文さんの態度について、はたて様から事情を聞く。なかなか興味深い話であり、一通りの疑問は氷解した。

どうやら文さん、取材と称して巡回している守矢神社での巫女との雑談中に、古今の英雄に剣術・兵法を教えた天狗の話をして、彼女に稽古を付けてやると言いだしたらしい。

私の知る限り、文さんが剣の腕に覚えがあるというのは初耳である。おそらくはその場の勢いか出任せだろう。

いくら現人神とはいえ所詮は人間の小娘、鵜天狗の相手にはならぬと高を括ったのだろうが、これが全くの誤算であった。守矢の巫女はめっぽう腕が立ち、文さんは終始しばしば打たれっぱなしで、天狗の面目は丸潰れ。「今日はこのくらいにしておいてあげましょう」などと負け惜しみ丸出しの捨て台詞を残して逃げ帰るように神社をあとにしたらしい。まったく痛快であり、現場を見えなかったのが実に残念である。

察するに、鍛錬場での一件は鵜天狗の面目を保つための意地であったのだろう。人間の娘に負けるなどあってはならぬとのいじましい動機と思われる。奮起するのは結構だが、私を巻き込むのはどうかして頂きたいものだ。

▼ 神無月 十六日

暦より一日遅れての満月。めでたく当小隊も夕刻より特別休暇の許可が下り、業務は切り上げ、当直を残してが早上がりとなった。樁の提案で班員の希望者を募り、「緋扇」まで足を伸ばして夕食を取った。

一刻半ほど呑んだくれた後、散会となり、そのまま夜雀庵に河岸を変えてにとりと夜更けまで飲む。先日のゴーグルについての意見交換と、次の対局の日取り、また最近増えている地震について話した。

にとりと別れての帰途で、鉾辻の西に不審な人影を発見。

落ち着きのない様子で茂みに身を潜めていたのは、このあたりでは見ない顔の狼であった。不審に思って問い詰めてみたところ、彼女、迷いの竹林に住む人狼とのこと。今夜は月見ということで、竹林周辺にも多くの人妖が集まり、騒がしくなったので逃げてきたらしい。

不審者扱いしたことへの非礼を詫び、夜の月明かりに映える見事な艶の毛並みを褒めてみたが、なぜか彼女は酷く気分を害したらしく、スペルを放ってきたので早々に退散する。

怒らせてしまったようだったが、一体何がいけなかったのだろうか。

▼ 神無月 十七日

衣替えをしている途中で、御山より突然の招聘。すわ何事かと向かえば、鞍馬様、三尺坊様立ち会いの下、天魔様より直々に、八坂様が将棋での対局を、ご所望であるとの旨を聞かされた。どうも先日の神社訪問の際、にとりと続いている大将棋の話題が出た折に、八坂様がそれを耳にされ、私に興味を抱いたというところらしい。自分が名指しされた経緯は納得できたものの、どこでどう尾鰭が付いたものやら、いつの間にか私が山で一番の棋士であるという扱いになっていた。まったくもって事実と反しており、驚きを隠せない。

ひとまず天魔様の誤解を解くことはできたものの、正式な要請となってしまう以上、今更断ることは出来ぬらしく、御山を代表しての対局の場が設けられることとなった。

概要は本将棋を用いた三番勝負。かの軍神との対局は身に余る光栄だが、一介の白狼天狗がそのような場に挑んで良いものだろうか。正直なところ、困惑している。

帰途の最中、たまたま同道した輩たちに難しい顔をしていると案じられ、夕食に誘われる。よほどひどい顔をしていたのだろう。

▼ 神無月 十八日

夜番で深夜よりの哨戒中、北東の空に流星を確認。博麗神社方面より御山の北、錆矛岳の方面へと流れ落ち、軌跡がしばし空に焼き付き残るほど。ここ数十年で見たなかでも極めて大きく、明るいものであった。

翌朝、班員を編成して念のため現地調査に向かう。一刻ほど調査を行うが隕石の落下地点は確認できず。結果をかすめて外の世界に落ちたものと考えられる。星に詳しい葉によれば、例年この時期は伊吹童子座の流星群が確認できるのだが、今回の流星はそれには当てはまらぬ客星と考えられるとのこと。

探索中、御山の領地の境界で魔理沙と遭遇。隕石の隕鉄目当てに侵入を試みたらしい。

隕石の落下跡は確認できない旨を説明するが、聞き入れぬ様子の彼女に対して弾幕戦となる。素らのバックアップもあり撃退に成功。口喧嘩はなおも絶えないが、訓練の成果は着実に出ているようで、新人三人の連携の上達は目覚ましいものがある。

午後より、引き継ぎを終えた後自宅に戻り、八坂様との対戦に備えて過去の棋譜を確認する。

▼ 神無月 二十日

釘砥峰にて丸一日半の監視任務。交代の直前に鉦ヶ岳山頂付近に巨大な影法師を目撃。直ちに現場に急行するも、これはどうも伊吹様の悪戯であった模様。深山の大岩に腰かけ、ひとり腰の瓢箪より酒を燗るお姿を見て安堵と共に拍子抜けする。どうも、伊吹様はここで古い友人と会っていたと思しき様子であった。

そのまま酒宴に誘われるが、勤務中であることを理由に辞退。文さんを含め、古参の天狗たちはこの方のかつての御山の支配者として非常に恐れているが、これまでに何度か話した限り、伊吹様はそうのように恐ろしい方ではないと感じる。古老たちの語る鬼と言えば傍若無人に横暴を通し、四六時中酒に酔って暴れる、理不尽の塊であったが――酒に酔っているという部分以外は、かなりの誇張が入っているのではないだろうか。絶え間なく酔っ払っていることには辟易する部分もあるが、そもそも素面な鬼というのも些か不気味であらうと思う。

もっとも、御山の外縁とはいえこんな近傍に鬼が来訪という事実は報告するにも難しく、内密のうちに引き取り頂くようお願いした。

去り際に伊吹様より忠告めいた助言を受ける。見えすぎる眼に頼りすぎるな、とのこと。意味はよく分からない。

守矢神社へ定期巡回。八坂様との対局に關しての準備等を進める。その際の雑談中、先日の方さんの剣術稽古の話が出、そのまま流れて巫女と立ち会った。

結論から言つて、守矢の巫女——東風谷早苗殿は噂にたがわぬ腕前であつた。木剣での稽古であれば小隊の中でも互角に打ち合える者は数名いるかどうか。特に、正眼に構えた切っ先を鵲鴿の尾の如く跳ねさせてからの打ち込みは特筆に値する。

守矢の祭祀を務める一族は、外の世界の諏訪という地において、代々、有名な剣士を輩出する家系であつたらしい。守矢の巫女もそれに倣つて幼少より剣術の鍛錬を積まされる事が常だという。考えてみれば軍神である八坂様の巫女なのだ。武に通じるのも当然のことであろう。

同席した洩矢様によれば、早苗殿は巫女としての務めの傍ら、今も素振り千回を日課として軽々とこなしているとのこと。人間が剣術で天狗を圧倒するなどというのは滅多にあることではないのだが、本人は腕に筋肉が付いて嫌だと不平を漏らすばかりで、自身の才能にまったく氣付いていないのが微笑ましくもあつた。

あれ以来、文さんは余暇返上で、仲間内の飲み会をも辞退して鍛錬に励んでいるようだが、果たして雪辱が成るかといえ、だいぶん厳しいのではないかと思う。

哨戒に出ていた杏、栗より鎬沢に侵入者ありとの報告。観兵式の練習を切り上げ、詰め所より急行する。途中、数度の発砲音が聞こえ、侵入者が銃で武装していることを確認する。班を二つに分け、警戒を強め、沢伝いに逃走する侵入者の追跡にあたる。

四半刻程の追跡の後、目標を沢の外れで捕捉。禁猟区を守らずに忍び込んだ里の猟師であった。逃亡を阻んで下さったのはたまたま居合わせた静葉様。構わず発砲しようとしていたのを見咎めたが、男は聞き入れないどころか逆上して静葉様に襲いかかってきたため、止む無く一撃くれて黙らせたとのこと。秋の静寂の象徴の名をもつ一方で、静葉様が拳一発で大木の葉を散らせる武闘派であることはあまり知られていないらしい。

検分の後、男を保護。詰め所へと護送する。既に何匹かの獣を仕留めており、立場を弁えず、聞くに堪えない罵詈雑言を繰り返していたが、御山の禁猟区は人里との合意で成り立っており、明確な協定違反である。議論の余地はない。

その後、守矢の二柱からの仲裁があり、男の処遇はいったんお預けとなって、里へと送り届けることとなった。栗はこの処置に相当憤慨していたが、静葉様が里人に言い含めてくださると仰っていたので、悪いようにはなるまいと宥める。

新スペルの開発に難航していたところ、突如地響きと土煙に上空より落下物。すわ流星かと身構えれば、地面に大穴を穿った大岩の上に、珍妙なる来訪者の姿があった。

桃のひどく甘ったるい匂いをさせる彼女は天人、比那名居天子を名乗った。彼女は地上に住まう者たちを導く天人の責務として、最近頻発している地震の原因を探っているらしい。手にした要石は地脈を鎮め、大地に安定をもたらすものである等とのたまひ、ところ構わずあたりの地面を穿ち始めたので、ただちに退去を命じた。

全く聞き入れる様子が無い彼女に対し、開発中の新スペルをもって対峙。程なく被弾せしめられたものの有効打とはならず、逆に彼女から上から目線でスペルの駄目だしを食らう。

新たなスペルは、レイビーズバイトの強化版の位置づけから、獲物を良く噛み締め飲み込む狼の牙を主眼にして題を「咀嚼玩味」としたのだが、彼女いわく、お前のような禽獣は字が無く、詩を噛み締めても味わってなどいられないから玩「味」とするのが丁度いい等との言い分である。もはや腹に据えかねたので手加減抜きで応戦。撃退する。

その後、近くを訪れた彼女の見張り役と思しき天女より、詫びと共に桃を頂く。美味。

▼ 神無月 二十四日

八坂様との対局の当日。御山を代表する棋士という立場には未だ得心はいかぬままにこの日を迎えた。対局は九天の滝直上の特設会場で行われ、大天狗様や天魔様まで同席し、多くの鴉天狗の報道、見物人まで集まる本格的なものとなった。

居心地の悪さはこの上なかったものの、応援団までいる中で逃げ出すわけにもいかず、死力を尽くして戦う覚悟を決める。対局成績は一勝二敗。不本意な結果ではあったが、こればかりは仕方のないところか。八坂様は外様に華を持たせたと御冗談を仰っていたが、正直あんな場で落ち着いて対局できるわけがない。

感想戦の後、かねてからの疑問であった「戦車」「スパイ」などの駒の使用法についてお聞きする。八坂様は一笑なされ、それらは別の将棋に使う駒であると教えてくださった。軍人の階級を用いた新しい将棋であるという。

また、聞くだに外の世界の打ち筋というのは非常に興味深いものであった。八坂様が仰るには、最近では式が将棋を打つこともできるようになり、彼等は名立たる名人を次々に負かしているという。さて、式に将棋を打たせるところで一向に面白くは無いように思うが、外の人間というものは相変わらず良く分からないことを考えるものだ。

▼神無月 二十六日

最近評判のカフェーの取材とのことで、はたて様に同道し人里に向かう。このような機会でもなければ減多にできないことであり、役得としてご相伴にあずかった。木苺と洋梨のタルトが絶品。帰り際に土産として皆の分を買い求める。

里の大通りを散策中に食い逃げの現場に遭遇。里の娘に頼まれ、はたて様共々成り行きで追跡に加わるも、途中で行方を見失う。

どうやら最近里に出没している食い逃げらしいが、風体怪しく、煙のように行方をくらますことから、まともな人間ではないのではないかと怪しまれているとのこと。私の千里眼でも追いつけぬとなると、あながち外れていもないのかもしれない。

午後より小雨。詰め所に戻り、事務を片付ける。タルトは小隊でも大好評であった。

▼ 神無月 二十七日

哨戒中、篠谷にて侵入者ありとの報告を受け、栞、椿を伴って現場に急行する。当該者は八雲の式の式である化け猫の少女であり、橙を名乗った。以前、博麗神社での宴会で、八雲の賢者に伴われて紹介されたことがあったが、彼女は私のことは覚えていなかった模様。

彼女には静葉様が同道しており、聞けば御山の裾野で道に迷いかけていた彼女を見つけ、案内していた途中とのこと。

話を聞くに、彼女に侵入の意図はなく、先日の八坂様との対局の記事を目にしての興味によるものであるという。御山の各紙がこぞって記事を書きたてたものだから失念していたが、文さんもあの対局の記事にしていた。正直、御山の外で文さんの新聞を真面目に購読している読者がいたというのが驚きである。

橙からの申し出は、彼女が作ったという式との将棋での対局の誘いであった。先日八坂様から聞いたばかりの話に俄然興味が湧き、近日中に対局の約束をする。

観兵式もあるため日程は来月となるだろうが、式が打つ将棋というのは一体どんなものだろうか。興味が尽きない。

▼ 神無月 二十九日

非番であつたが、明け方から雨がちらつく空模様。

午後に小康状態となつたため、市へ出かけて生活用品を買い足した。このところの冷え込みに備え、鍋でもつつこうと材料を揃える。鯉節と昆布が切れかかつていた事を思い出して乾物屋に寄るが、生憎とどちらも品切れであつた。

帰途の途中で雨に降られ、煙草屋の廂を借りて雨宿り。しばらく訪れていなかったこともあり、すいぶん長く話し込んでしまった。葉の風味が違つと力説されて色々買わされたが、順に試すしよう。

雨は夕刻過ぎから雲交じりとなつた。やや風邪気味であるため、早めに床に就くことにする。

▼神無月 三十日

雪のちらつく中、八雲の式、八雲藍殿が御山に来訪。天魔様への面会ということで、鞍馬様よりの要請で剣ヶ峰への送迎に向かう。

道中、藍殿と軽く雑談。どうも最近、大結界の様子に変化があるらしく、その為に妖怪の賢者より天魔様や八坂様との会談を持ちたいという話であった。藍殿は口を濁していたが状況は逼迫していると思われ、数日中に何らかの異変が起きかねぬ事態と思われた。

早急の対応を迫られた場合、観兵式の日程にも影響があると考えられる。念のため帰隊後、素直に非常時対応の連絡網を整備させる。

午後より天候は回復。夕刻、別件で手の離せない楓に代わって、博麗神社へ巡回。境内にはいつも通り魔理沙と、たまたま早苗殿が居合わせ、珍しく茶菓子などが出た。博麗神社の薄くない茶というのは少々不気味である。

またその折、早苗殿から最近文さんが神社に訪れなくなったことについて訊ねられ、誤魔化すのに苦労する。あの人もいざ自分のこととなると意気地が無いものだ。

▼ 霜月 一日

夜勤からの南方哨戒任務で疲弊し、帰宅して布団に倒れ込んだところ、寝入りばなを文さんに叩き起こされ、そのまま呑みに引きずり出された。

愚痴の内容は大半が守矢神社の巫女に関するもの。文さんはあれこれと理由を付け、いかに早苗殿が非常識であり、天狗と人間の身分を弁えずに無茶ばかりするのかを力説して私に同意を求めてきたが、要するにただの惚気であり、心底辟易する。

いいから早く押し倒してしまえと喉まで出かけたのを飲み込み、愚痴に付き合う。普段は我関せずの傍観者として御山の体制や大天狗間の政争を皮肉ってばかりの文さんが、こうまで一人の人間に拘るのはなかなか見ない姿で、新鮮でもあった。

どうやらすでに何軒も梯子をしていたらしく、一刻ほどで酔いつぶれた文さんを連れて退店。求められた支払いは全て文さんのツケで済ませた。

泥酔して喚く文さんを送り届ける途中、地震に遭遇。酔ったまま神社に飛んで行こうとする文さんをなだめるのに難儀する。幸い、地震自体は大きなものではなく混乱もすぐに収まったが、最近頻度が増しているのは確かで、以前の天人の警告が思い起こされた。

▼ 霜月 二日

緊急連絡網で起床。異常事態につき、全小隊に招集命令が発令。
空が紅い。御山に何が起きたのだろう。

▼ 霜月 二日 本日二信

詰め所より一時帰宅。中央の混乱がひどく全容はいまだ掴めない。鞍馬様が調整に奔走されているが、指揮系統もともに機能しておらず、各小隊が個別に動くしかない状況である。

現場での状況は不可解の一言。大規模な結界災害により、中央が機能喪失、天魔様以下、大天狗様全員が行方不明、それに乗じた反乱勢力のクーデターなどの流言が広まっており、混乱が酷い。問題の「裂け目」から先は命令の千里眼でも見通せぬことから、結果に異常が起きることは確かだと

様々な噂については真偽不明。これより再度、現場へ向かう。

隊長、ご不在のようでしたのでお許しください。
楓様より至急連絡を請うとのことでした。

栗

サバ、ここのへんたー
早く連絡しなさい
文

今日も戻ってきてないのか。
あんまり心配かけんなよ、バカ桜

大走隊長、御入りでしたら至急詰め所に。

連絡お待ちしています

蓮

×リー、もしこれを見てたら
今すぐここを離れて。
なんだか解らないけど
遠いかけられてるみたい。

さっきの場所で
落ち合いますよう

どこに行っちゃったのよ、蓮子。
まさかここに戻るなんてことないでしょうね。

なんでもいいから連絡待ってるわ！

▼ 霜月 七日

懸案が一段落となり、ようやく日記を再開できる。

外来人の少女二人は、無事本日午後に博麗の巫女によって外の世界へと送還。結界のほつれに伴う御山の混乱もようやく鎮まってきた。

なんとも珍妙な顛末となったが、ひとまず肩の荷が下りた気分だ。

霜月二日に起きた騒動に關し、九代目阿礼乙女の稗田阿求女史および、彼女の友人である本居小鈴嬢の協力で判明した経緯について、以下に備忘録的に記しておく。

神無月十八日に觀測された客星によつて、大結界に一時的な綻びが発生。同時期に起きた地脈の乱れが引き金となり、「外の世界」の建造物の一部が結界内に流入した。この際、本来は機能するはずだった内外の常識を隔てる境界がうまく働かず、建造物は形を保ったまま一時的に結界の外と内が繋がってしまったらしい。

現在も結界の修復にあたっている藍殿によれば、当日の午前から日中にかけて、結界外部に強く幻想を求める想念が励起していたとのこと。それゆえに大規模な「幻想入り」が発生したものの、外界との繋がりを持ったままでの流入によつて結界に負荷がかかり、各所で事故を多発させることとなった。

御山を中心に多数の者達が、外の世界の風景や住人と接触したとの報告がある。指揮系統の回復と共に大きな混乱はなく騒動は終結したが、あと一歩間違えればかつてない異変となるところであった。

ともかくにも前代未聞の事態であり、これに際しての対応でまる四日、現場と詰め所の往復で帰宅できずにいた自分が、ようやく疲れ果てて戻ってきた自宅に上がり込んでいた不審な少女二人に対し、我を忘れて吠え、噛み付こうとしてしまったことに關しては、さすがに情状酌量の余地があるのではないだろうか。

最終的に誤解は解けたとはいえ、反省しきりである。

午後より文さんが来訪。珍しく労をねぎらわれる。同道していたはたて様によれば、未曾有の危機に対してすばやく守矢神社の協力を取り付けたことで、文さんの手腕が中央に大きく評価されたとのこと。次郎坊の襲名に關して推薦があったらしいが、ますます御山の政争に巻き込まれると本人は憂鬱そうであった。

夕刻、詰め所に差し入れ。間に合わせではあるが、鴨せいろは好評であった。
以後、多過なし。

【奥付】

「枕哨戒日記」

平成二十六年十一月二日 第二百二十九季 文々。新聞友の会

発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

著者 銅折葉

印刷所 八雲出版



※本作は「上海アリス幻楽団」様の「東方Project」の二次創作です。

作中に登場するいかなる人物、組織も実在のものとは関係ありません。

